

人間は、主観的な営みの存在である。生命自身は法則に従って生きていながら、活動は主観的なのである。真理に従っていれば心が喜び、真理から外れば心は不快感に苛(かが)まされる。心が低くなれば、そのような感が起こることはなく、その代わり、自分や周りに不幸が起こるようになるのである。

● 断末魔のあがきをする良心を捨てた日本

主観に悪性が入り込み、心を鈍感にして誤りを多発させたために、主観を排することが大切なことと思われてきた。科学技術の進展とともに、法則や客観性の価値が高まるにつれて、ますます主観は軽んじられ、猫も杓子も法則性、客観性を叫ぶようになった。理性主義や知性主義が跋扈(ばつこ)し、人間が奢り高ぶるようになった。それとともに、神は追いやられ、相對主義が蔓延することとなり、良心の絶対性も否定され、今見るような悪の跋扈を許す結果となったのである。一方、良心の代弁者であるべき宗教家の靈性からの逸脱も、神や良心に対する絶対性への不信を募らせている。

主観を軽んじることは、生命を軽んじることもある。生命は主観的存在なのである。主観を軽んじることは善の大本である良心まで軽んじることに通じる。学が栄えるほど、主観は軽んじ